慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福田徳三著 労働経済講話
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.3 (1918. 3) ,p.402(94)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19180300-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

福田德三著『勞働經濟講話』

（大正七年二月東京佐藤出版部發行　四六版四三二頁定價金一圓八十錢）

本書は福田博士が昨年二月發表せられた『國民經濟講話』（乾卷）の續篇である。著者の最初の計畫は同講話の殘部を坤卷として上梓せらるゝに在あつたが、其の準備中全部を一册に收むることの困難であるを發見せられた故に、其中勞働に關する部分を一纏めにし、『勞働經濟講話』と命名して公にせられた次第である。從つて本書は『國民經濟講話』の一部であると同時に、——本書は『國民經濟講話』（坤卷前册）の名を冠して居る——勞働經濟の原理に關する單行本とも看做し得る。

本書に載する所は第二十二章乃至第三十章の九章に分たれ、其題目は生産の自然要素と文化要素、勞働の意義、勞働の種類勞働力の大小、勞働能率（效程）の根本要件、勞働時間と能率、勞働制度及び勞働の組織であるが、其中に於て著者が最も意を用ひられたるは勞働效程の增進に關する最近の研究の紹介であると思はれる。

本書には全篇を通じて勞働經濟の理論に對するスミス、マルサス其他著名の學者の所說を引用し、之に批評を加へてあるが就中マルクスの勞働論は最も綿密に紹介され且つ解剖されて居る。著者自身の見解に對しては或は幾多の異說を有して居る者もあらうが、著者の着眼點の非凡なる一事に就きては何人も異論がなからう。乾卷は既に五版を重ね洛陽の紙價を高からしめたるが、紙數に於ては劣れるも其內容の陳腐ならざる點に於て引照の該博なる點に於て、讀者を刺戟覺醒せしむるの警句、機言又は獨創的觀察を以て滿たされたるの點に於て、乾卷に讓る所なき本書が、讀書界の人氣を集むるに至る可きは疑ふの餘地がない。

工藤重藏著『最近財政之研究』

（大正六年十一月東京有斐閣發行　菊版五八〇頁正價金二圓五十錢）

本書は會計檢査官たる著者が最近數ヶ年中に於て主として國家學會雜誌に寄稿せし財政に關する論文を集載せるものである。論文の大部分は豫算又は租稅問題を論題として居る。豫算問題に屬する事項としては財政案に對する國會兩院の關係、年度開始と豫算の未議了、豫算超過及豫算外支出、議會の解散と豫算の善後策等を論じ、租稅に就きては佛國の新所得稅、土地增價稅、相續稅法、消費稅の課稅方法、畜犬稅に關する著者の研究を載せてある。尙ほ此外軍需物件の購入方法並に國債償還問題に就き各一篇を收めて居る。

斯くの如き多岐に亘る論文の內容を一々紹介するは困難であるが故に省略するが、著者は廣く泰西學者の著述論說を涉獵し歐米先進國に於て行はるゝ學說を經とし實情を緯と爲し極めて眞摯の態度を以て、財政學上健實なる思想の鼓吹に力を盡されて居る。本書は財政學の全般を組織的に論述したものではないが、前記諸問題の研究者に取りては缺く可からざる一頁參考書である。

河田嗣郎著『穀價ノ研究』

（大正六年十二月京都法學會發行　菊版二六八頁正價金一圓五十錢）

本書は穀物の價格に對する關稅の作用並に定期取引の作用に關する著者最近の研究を載せたるものである。著者は此作用を學理的に說述するのみならず、豐富なる穀價の統計及び圖表を用ゐて所說の正確なることを證明せんと努められてゐる。此等の統計は我國のみならず英獨兩國のものも含むんで居るが爲めに、穀價の變動に就き內外の實情を比較するの便を有する。

目下米價の暴騰が米價と關稅、米價と定期取引との關係に對して新しき注意を喚起しつゝある際、此兩關係に對する細密なる研究を載せたる本書の上梓せられたことは學界の一慶事であると云はねばならぬ。